第一次世界大戦以前の日独間の異文化体験

髙辻　正久

1.　はじめに

19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、日本の近代化推進のために多くの日本人がドイツに留学した。彼らの中で、ドイツ滞在中に体験したことや感じたことを日記や手紙などに書き残した人は少なくない。

一方、ドイツからも同時期に、お雇い外国人として、あるいは私的な旅行で日本に来たドイツ人たちがいた。そして彼らの中にも、日本滞在中に体験したことや感じたことを、日記や旅行記などに書き残した人たちがいる。

当時の日独相互の印象について、彼らはどのように記述しているだろうか。また、彼らの記述には、異文化を見る視点として、その時代に特有な特徴が見られるだろうか。

本稿では、日本とドイツが最初に国交を結んだ 1861 年の日普修好通商条約から、第一次世界大戦が勃発して日独関係が一旦絶たれる 1914 年までに書かれた記録をいくつか取り挙げて、当時の日独間の異文化体験の記述の特徴について考察したい。

2.　異文化理解と文化の表出のレベル

2.1.　異文化理解の難しさ

異文化体験の記録を考察する前に、まず文化とは何かを考える必要がある。たとえば岡部朗一は、文化を次のように定義している。

> 文化を正式に定義すれば、ある集団のメンバーによって幾世代にもわたって獲得され蓄積された知識、経験、信念、価値観、態度、社会階層、宗教、役割、時間

-空間関係、宇宙観、物質所有観といった諸相の集大成であるといえよう[1)]。

この定義によれば、文化には価値観や観念など、直接観察することができない要素も含まれている。つまり、ある国の文化を理解するためには、その国の衣食住や言葉・儀式・芸術などの直接観察できる要素に加え、直接観察できない要素もあることを考慮に入れなくてはならない。

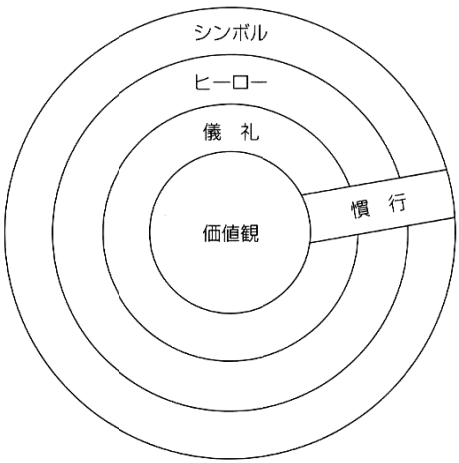
また、第一次世界大戦以前の日本人とドイツ人の相互の文化理解に関して考えると、明治時代の日本では、留学生以外に外国へ行く人はまだ少なく、一般庶民が実際に外国人、特に西洋人と接することはほとんどなかった[2)]。一方、第一次世界大戦以前のドイツ人にとっても、日本が 19 世紀半ばまで 200 年以上も鎖国していたため、日本の情報を得ることは難しかった。第一次世界大戦以前の日本人とドイツ人が互いの文化を理解することは、非常に困難だったと推察される。

2.2. ホフステードの文化の表出のレベル

一方、文化を構成する各要素が、どの程度人間に観察されうるかということについて、オランダの社会心理学者ヘールト・ホフステード（Geert Hofstede）は、文化の表出のレベル（図 1）を考案している。表出のレベルとは、外部に現れる度合いという意味である。ホフステードは、文化を構成する要素を、表出のレベル順に①シンボル・②ヒーロー・③儀礼・④価値観という 4 つの概念に分類した。

1) 岡部（1996）、42 ページ。
2) 河原（2000）、33 ページを参照。

図1　文化の表出のレベル　（ホフステード 2013: 6）



①シンボルとは、同じ文化を共有している人々だけが理解できるもので、具体的には、特別な意味を持つ言葉やしぐさ・服装・髪型などである。シンボルは、文化の最も表層にあるため、最も観察されやすいものである。それゆえ、ある文化集団のシンボルが他の文化集団によってコピーされることは、たびたび生じる。また、新しいシンボルが生まれて、古いシンボルが消えることも起こりやすい[3)]。

②ヒーローとは、その文化において非常に高く評価され、人々の行動のモデルとされる人物である。これには、現在生きている人物の場合だけではなく、故人や架空の人物の場合もある[4)]。ヒーローは、ホフステードの文化モデルではシンボルの次に表層に近い。

③儀礼とは、人々が集団で行うもので、何か望ましい目的を達成するための手段としては役に立たなくても、その文化圏の人々にとって社会的に必要なものとみなされているものである。具体的には、社会的儀礼・宗教的儀礼・挨拶の仕方・尊敬の表し方などである[5)]。

以上の 3 つのレベルは、図 1 のモデルにあるように、いずれも「慣行」として他の文化圏の人々の目に直接触れることが可能である。

3)　ホフステード（2013）、5-6 ページを参照。
4)　ホフステード（2013）、6 ページを参照。
5)　ホフステード（2013）、6 ページを参照。

そして④価値観とは、ある状態の方が他の状態よりも好ましいと思う傾向のことである。具体的には、あるものに対して、良いと感じるか悪いと感じるか・正常と感じるか異常と感じるか･上品と感じるか下品と感じるかなどの感情である。このような価値観は、人生のきわめて早い時期に形成され、無意識に内面化されるため、他の文化圏の人々から直接観察されることはない。さまざまな状況において人々がとる行動様式から推論されるだけである[6)]。そしてホフステードは、慣行は時代とともに変わるが、価値観は変わりにくいと述べている[7)]。価値観は、ホフステードの文化モデルでは最も中枢にある。

このようにホフステードは、文化を構成する要素を 4 つの概念に分類した。2.1.で紹介した岡部による文化の定義では、経験・信念・価値観・物質所有観など人間の内面にある直接観察できない要素が多く挙げられているのに対し、ホフステードの文化モデルでは､直接観察できる慣行に関する要素が多く挙げられている。その点において、ホフステードの文化モデルは、初めてその文化に接した人の異文化体験の記録を考察するための参考になると思われる。したがって､本稿では、ホフステードの文化モデルに沿って、第一次世界大戦以前の日独間の異文化体験の記録を見て行きたい。

なお、このホフステードの文化モデルは世界全体を対象としたモデルなので、本稿で取り挙げる日独に限られた少数の事例がそれと合致しない部分も当然生じると予想されるが、その点についても考察したい。

3.　第一次世界大戦以前の日独間の異文化体験

ここでは、当時の人々が書き残した日記などの記録の中から日独二例ずつ取り挙げて考察する。具体的には、2.2.で取り挙げたホフステードの文化モデルにおける 4 つの表出のレベル（①シンボル・②ヒーロー・③儀礼・④価値観）の順に例を挙げて考察し、彼らの異文化を見る視点の特徴について探りたい。

6)　ホフステード（2013）、6-9 ページを参照。
7)　ホフステード（2013）、15-16 ページを参照。

3.1. ドイツ人の日本での異文化体験

まず、ドイツ人の日本における異文化体験の記録を見る。考察の対象として、考古学者のハインリヒ・シュリーマン（Heinrich Schliemann）の旅行記と医師のエルヴィン・フォン・ベルツ（Erwin von Bälz）の日記を選択した。

3.1.1. ハインリヒ・シュリーマンの日本での異文化体験

ハインリヒ・シュリーマン（1822-1890）は 1871 年にトロイア遺跡を発掘したことで知られているが、その七年前の 1864 年に世界周遊の旅に出た。エジプト・インド・シンガポールなどを経て、翌 1865 年に中国に滞在した後、同年 6 月に日本を訪れ約一ヵ月間滞在した[8)]。当時の日本は幕末で、すでに開国していたが、外国人を排斥しようという攘夷論が広まっていた。また、前年（1864 年）に長州征討が起こるなど、江戸幕府と反幕府派の対立が激しくなっていた。

シュリーマンはこの旅行で見聞したことを、旅行記 „La Chine et le Japon au temps présent“（『現代の中国と日本』）として、1867 年に刊行している[9)]。この旅行記に記述されている当時の日本の印象について考察する。

まず、①シンボル（言葉・しぐさ・服装・髪型など）に関する記述を見る。

言葉に関しては、寺小屋を訪問したときの日本語に対する印象の記述がある。

> 教師は学校を代表して私に挨拶をした。しかし、互いの意思疎通が困難だったため、我々の会話は長くもなく面白いものでもなかった。それでも私は、さまざまな日本語の文字の複雑な種類のために、若者はまず漢字で書くことで日本語が教えられるということを理解した[10)]。

15 ヵ国語を修得したほどの語学力を持ったシュリーマン[11)]にとっても日本人教師とのコミュニケーションは困難だったようだが、日本語の文字の種類が複雑なことと国語教育が漢字を書くことから始められることに着目している。

---

8) 島谷（2012）、125-126 ページを参照。
9) フランス語で執筆され、のちにドイツ語に翻訳された。本稿では、ドイツ語版を参照した。
10) Schliemann (1984), S.110.
11) 島谷（2012）、125 ページを参照。

服装に関しては、日本人女性の着物に対する印象の記述がある。

> 日本の女性の衣服は、私がこれまで見た中で、フープスカートとは最も違っていた。日本女性はシャツのような木綿の服の上に、鮮やかな、普通は水色で、男性のナイトガウンのように前が開いた長い衣服だけを着る。これらは帯で体のまわりにきつく付けられるので、それによって歩調や移動の速度は妨げられる[12)]。

フープスカートとは張り骨で傘のように広げたスカートで、シュリーマンには日本人女性の着物がそれと大変異なって見え、この服装では速く歩くのに支障があると述べている。①シンボルに関してはこの他に、江戸時代の男性の髪型である丁髷に対する印象の記述などがあった[13)]。

②ヒーロー（その文化において非常に高く評価される人物）に関する記述は特に見られないが、強いて挙げれば、将軍徳川家茂の行列を見物したことについて書いている。

> 一時間半歩き、私は行列を見ようとする外国人たちに指定された木立ちに着いた。そこには外国人が約 100 人と秩序に気を配る警察官が約 30 人現れた。さらに一時間半後に、ようやく行列が近づいてきた。[中略] そしてついに大君が来た。他のすべての馬たちのように、わらのサンダルを履かせた美しい褐色の馬に乗っていた。彼は二十歳くらいに見え、威厳のある美しい姿で顔色は浅黒い。金色に刺繍された白い服を着て、金色に染めた漆塗りの帽子を被っていた。二本のみごとな刀を腰にぶら下げていた。約 20 人の白い服を着た高位高官の人たちが彼に随行して、行列のしんがりを務めた[14)]。

このとき家茂は、第二次長州征討のために上洛する途中だった。シュリーマンは将軍の行列を、このように詳細に観察し、家茂の姿に威厳を感じたようだ。

次に、③儀礼（社会的儀礼・宗教的儀礼・挨拶の仕方・尊敬の表し方など）に

12) Schliemann (1984), S.65.
13) Schliemann (1984), S.59.
14) Schliemann (1984), S.72-74.

関する記述を見ると、日本人の宗教心に対する印象の記述がある。

> 日本の宗教について私が今まで見て知ったことから、国民の生活は宗教心にあまり深く浸透されてなく、また日本社会の上流階級は多かれ少なかれ懐疑的であることを確信した[15)]。

ドイツで主に信仰されているキリスト教は、唯一の神を崇拝する一神教である。シュリーマンの父親は、プロテスタントの牧師であった。一方、当時の日本では、1868 年に明治政府により神仏分離令が出されるまで、神道と仏教を融合した神仏習合が行われていた。また、神道には教義がない。このような日本の宗教の在り方に対し、シュリーマンは違和感を覚えたに違いない。キリスト教に関しては、次のような記述もある。

> 日曜日だったが、税関は開いていた。というのは、日本人はこの休日を知らないからである。二人の税関の職員が私を友好的な笑顔で迎えた。「おはよう！」と言い、地面に向かいおじぎをし、30 秒間この姿勢のままでいた[16)]。

キリスト教の安息日である日曜日に日本人が仕事をすることに、シュリーマンは違和感を覚えたようだ。同時に、ここには日本人の礼儀正しい態度についても書かれている。③儀礼に関してはこの他に、日本人が食事のときに正座して箸を使って食事をする様子について書かれたものなどがあった[17)]。

次に、④価値観（ある状態の方が他の状態よりも好ましいと思う傾向）に関する記述だが、日本人の性格について書かれたものがいくつかある中で、日本人の清潔さに感心する記述がある。

> 日本人が世界で最も清潔な国民であることは、明白である。どんなに貧しい人でも、少なくとも一日に一度は、すべての町にある公衆浴場に行くことを怠らない[18)]。

15) Schliemann (1984), S.101.
16) Schliemann (1984), S. 60.
17) Schliemann (1984), S.63.
18) Schliemann (1984), S.67.

シュリーマンは、日本人が貧富の別なく毎日風呂に入ることに感心している。当時のドイツは、まだ統一される前のドイツ連邦だったが、毎日入浴することは珍しかったようだ。日本人の清潔さに関してはこの他に、「日本のどの住居も清潔さの手本である[19)]」という記述があった。

一方、日本の公衆浴場が男女混浴であることに対する印象の記述もある。

> 父母・夫婦・兄弟が皆、共同入浴を承認している。幼年時代からこの浴場へ毎日行くことが習慣になっているので、これらの人々は叱られたり非難されない。ある国民の道徳的な見方を他の国民と比較することは、大変難しい[20)]。

シュリーマンは、当時の日本人が日常的に混浴することに対し、日本独自の価値観を感じたようだ。また、彼が文化相対主義の視点で観察していることもうかがえる。

3.1.2.　エルヴィン・フォン・ベルツの日本での異文化体験

次に、医師のエルヴィン・フォン・ベルツ（1849-1913）の日記を見る。

ベルツは東京医学校（現在の東京大学医学部）で医学を教えるために、1876 年 6 月に来日し、日露戦争が終わる 1905 年まで、29 年間もの長期にわたって日本に滞在し、日本医学の発展に尽くした。また、彼は草津温泉を世界に紹介したことでも知られている[21)]。

ベルツは日本滞在期間中に日記をつけたが、彼の死後に息子のトク・ベルツ（Toku Bälz）が編集し、„Das Leben eines deutschen Arztes im erwachenden Japan“（『黎明期日本におけるあるドイツ人医師の生活』）として 1931 年に刊行した。この日記に記述されている当時の日本の印象について考察する。

まず、①シンボルに関する記述を見る。

言葉に関しては、1889 年 3 月 2 日付の日記に、舞踏会で出会った日本人女性が西洋語に堪能だったことについて書いている。

19) Schliemann (1984), S.62.
20) Schliemann (1984), S.69.
21) 島谷（2012）、194-195 ページを参照。

日本の女性の出現により特に魅了されたのが小鹿島夫人で、私が出会った中で最も魅力的な女性だった。彼女は英語やフランス語・オランダ語を流暢に話し、また日本の袴を洋装の一部分に使用する勇気があった[22)]。

ベルツはこの日本人女性が舞踏会で袴を着けていることにも感心しているが、当時の日本人が舞踏会で和服を使用することは珍しかったのだろう。言葉に関してはこの他に、1876 年 6 月 9 日付の日記に税関において西洋語が通じなかったことについての記述[23)]や、1876 年 6 月 26 日付の日記に日本人学生のドイツ語能力の高さに感心する記述[24)]があった。このようにベルツの言葉に関する印象の記述を見ると、彼の関心は日本語そのものよりも、日本人が西洋語をどのくらい話せるかということにあったように思われる。

服装に関しては、1877 年 1 月 1 日付の日記に、正月における日本人の洋服姿に対する印象の記述がある。

哀れな日本人。あなたたちは言い表せぬほど体に合わない燕尾服とぞんざいなズボンの中に押し込められている。また、頭にはたいてい決して似合わないシルクハットをかぶっている。[中略] これらの人々は、自国の祝祭日の服装であればよく似合い、またしばしば威厳があって高貴に見える[25)]。

ベルツはこのように、日本人には洋服よりも和服の方がはるかに似合うと思っていた。それゆえ舞踏会において袴を着けた日本人女性に感心したのだろう。

次に、②ヒーロ―に関する記述を見る。

1879 年 3 月 1 日付の日記には、歌舞伎を鑑賞したことについて書いている。

いつものように、いくつかの芝居が上演された。最初に二つの歴史上のテーマで、一つは『赤松』で、多数の打ち殺しと切腹があった。もう一つは『義経と弁慶』で、両者は 12 世紀の日本の歴史において最も人気のある人物である。彼らは嫉

22) Bälz (1931), S.102.
23) Bälz (1931), S.22.
24) Bälz (1931), S.25.
25) Bälz (1931), S.43.

妬深い兄の頼朝が義経を捕まえるために建てた関所を、山伏に変装して行く。将軍の役人を左団次が、弁慶を団十郎が演じた。この両者は、快活で理知的な中年の男性である菊五郎とともに、日本の最高の俳優と見なされている[26)]。

このようにベルツは歌舞伎の鑑賞を通じて、源義経と武蔵坊弁慶が日本の歴史上人気のある人物であることを知り、同時に市川団十郎・市川左団次・尾上菊五郎が当時の日本を代表する歌舞伎役者であることを知った。

次に、③儀礼に関する記述を見る。

1877 年 1 月 1 日付の日記には、日本の正月に対する印象の記述がある。

正月は、日本で最大の祝祭日である。すべての街路がこれを証明している。家の前には竹と松が立ち、聖霊降臨祭の時節のドイツの町のようだ[27)]。

ベルツは正月を日本の最大の祝祭日とみなし、さらにドイツの聖霊降臨祭（Pfingsten）にたとえている。復活祭（Ostern）から 50 日目に行われる聖霊降臨祭ではシラカバの新緑の枝が家の玄関や窓に飾られるが[28)]、正月に飾られる竹と松がそれと似たように映ったのだろう。

また、1879 年 11 月 16 日付の日記には、京都で祇園祭を見物し、山車や練り物に対し独特の印象を持ったことを書いている。

低い車のいちばん上には、さまざまな日本の歴史の人物、たとえば橋の上の義経や弁慶が混凝紙や木材で非常に上手く作られ、豪華な絹の服をまとって立っている。そのまわりで、若い男たちがさまざまな楽器で大騒動を起こしていた。有名な練り物、すなわち京都の最高の芸者の行列を見る機会を得た。晩に照明のもとに行われる演劇的な行進は、通例は 7 月に行われるが、今年はコレラのためようやく今行われる。それは本当に独特だった[29)]。

26) Bälz (1931), S. 50-51.
27) Bälz (1931), S.42.
28) 小塩（1997）、74 ページを参照。
29) Bälz (1931), S.67.

山車の上の源義経や武蔵坊弁慶の人形を見て、ベルツはここでも彼らがヒーローであることを知る機会を得ている。③儀礼に関してはこの他に、1879 年 7 月 12 日付の日記に隅田川の花火大会を見物したことについて書かれたものがあった[30)]。

次に、④価値観に関する記述だが、日本人の性格について書かれたものがいくつかある。

1879 年 4 月 6 日付の日記に、日曜日に向島に散歩に行った際に、日本人が道を歩くときの行儀のよさに感心する記述がある。

> 互いに入り乱れて移動するすべての人々が、整然として静かだった。粗暴な言動や酔っぱらいがわめくこともなかった。礼儀がすっかり身についた国民だ[31)]。

さらに、1904 年 10 月 28 日付の日記には、遅れた汽車を待つ日本人の態度に感心する記述がある。

> 昨日、ハナと東京に戻った。汽車が大変遅れた。汽車を待ちながら、すでに何度もしているように、私は当地の旅行者の態度を、相応した状況にあるドイツの駅における旅行者の態度と比較せざるをえなかった。ドイツでは、このような機会に、誰もが遅延や混乱をののしる。「不始末だ」、「これでも、運転しているのか」や似たような発言が、日常茶飯事である。日本では ― イギリスやアメリカと同様に ― 誰もが黙って待つか、何か他のことを話している[32)]。

ハナとは、ベルツの日本人の妻である。妻と遅れた汽車を待つ際、彼は日本人の態度をドイツ人と比較している。このように、ベルツは日本人の性格について、行儀よく自制心があるという印象を持ったようだ。

この他に、1876 年 10 月 25 日付の日記には、日本の近代化に対する印象と日本人の歴史に対する考え方について書いている。

30) Bälz (1931), S.60-61.
31) Bälz (1931), S. 53.
32) Bälz (1931), S. 357.

あなたがたは、おおよそ次のように想像しなければならない。日本国民は、10年にもならない前まで封建制度や教会・修道院・同業組合制度などの我々の中世の騎士時代の文化状態にあったが、昨日から今日へ一飛びで我々ヨーロッパの文化発展の 500 年を飛び越えて、19 世紀のすべての成果をすぐに習得しようとしているかのようだと。［中略］しかし ― 奇妙なことに ― 今日の日本人は自分自身の過去について、もはや知りたくはない。それどころか、教養人はそれを恥じている。「ああ、すべてがとても野蛮だった（原文のまま）」と私に説明する人がいて、またある人は、私が日本の歴史について質問したとき、はっきりと「我々には歴史はない。我々の歴史は、今になってやっと始まる」と言った[33]。

この記述には、当時の日本人が近代化を急ぐあまり自国の過去を否定するほど西洋文明を崇拝していたことがうかがえる。しかし、ベルツは当時の日本人のこのような考え方を不思議がっている。

3.2. 日本人のドイツでの異文化体験

次に、日本人のドイツにおける異文化体験の記録を見る。ここでは、考察の対象として、物理学者の寺田寅彦の手紙・随筆と保険会社社員の髙辻亮一の日記を選択した。

3.2.1. 寺田寅彦のドイツでの異文化体験

寺田寅彦（1878-1935）は、宇宙物理学の研究のために、1909 年 5 月にベルリン大学に入学した。そして 1911 年 2 月にゲッティンゲンを出発するまで、約 1 年 9 ヵ月ドイツに滞在した[34]。当時のドイツはヴィルヘルム二世の治下で、積極的に海外に進出する世界政策が推進されていた。

寅彦は、このドイツ滞在期間中に体験したことや感じたことを、手紙や随筆に書いている。これらに記述されている当時のドイツの印象について考察する。

まず、①シンボルに関する記述を見る。

言葉に関しては、1909 年 8 月 2 日付の小宮豊隆宛の手紙にドイツ語に対する印

33) Bälz (1931), S.27-28.
34) 和田他（2006）、130 ページを参照。

象の記述がある。

> 独逸語には相変らずこまって居ます。日本の片仮名で現はせる様な音は誠に少いといふ事が始めて此頃わかって来たような気がする。妙な中途はんぱな音がゴチャゴチャと早口に出てくるので始終めんくらふ。就中 R の音などは一番厄介です。[中略] Wurst などゝ来ては到底上品な日本人の咽喉で真似の出来ない野蛮な音である。とても真似する気にならぬ。ö は猛獣の吼へる如く ü は鳥の叫び声の様である。例のレストーランで御客の注文の御料理をオーバーから聞て料理番に伝へる女の叫声などはテアガルテンでよく鳴いている鳥の声と寸分ちがはぬ。どうしても森林の中から発達した人種に相違ないと思ふ[35]。

このように寅彦は、ドイツ語の音に対して非常に違和感を覚え、日本人が真似することが難しいと述べている。

また、随筆『ベルリン大学』（1935 年）では、大学の講義を通じて、ドイツの方言に苦労したことについて次のように書いている。

> マイヤーの講義はザクゼン訛りがひどく「小さい」をグライン「戦争」をグリークという調子で、どうも分りにくくて困った[36]。

服装に関しては、1909 年 6 月 5 日付の父寺田利正宛の手紙に、ドイツ人女性の服装に対する印象の記述がある。

> 当地の婦人の服装などは概して質素かと思はれ候。祭日などには随分めかした風も見へ候へ共一体に地味な風にて殊に若い娘など程地味な鼠か茶位の飾も何もない服を着、男のきる様な茶帽子をかぶり居り候[37]。

このようにドイツ人女性の普段の服装は、地味なものに映ったようだ。その一

35) 『寺田寅彦全集第二十五巻』、134-135 ページ。
36) 『寺田寅彦全集第一巻』、280 ページ。
37) 『寺田寅彦全集第二十五巻』、103 ページ。

方で、1909 年 5 月 13 日付の父寺田利正宛の手紙では、市街で見たドイツ軍人の服装が大変美しかったと書いている[38)]。

次に、②ヒーロ―に関する記述を見る。

1909 年 9 月 24 日付の小宮豊隆宛の手紙には、フランクフルトのゲーテハウスに行ったことについて書いている。

> 今日此のゲーテハウスといふのを見物しました。此家の三階即ち屋根裏の中央の室がゲーテの若い時の書斉で机も椅子も書物も其儘に置てある。此の室の高い窓から時々往来を眺めて十八世紀の娘さん達の顔を品評した事だろうと想像が出来る。［中略］裏には遺物が沢山陳列してあって君方が御覧になったら面白い事だろうと思ひました[39)]。

ゲーテハウスは、ドイツを代表する文豪ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe）の生家を復元した建物である。寅彦はこのゲーテハウスを見物することにより、ゲーテがいかにドイツ人に尊敬されている人物であるかを感じただろう。また、彼はワイマールにおいても、ゲーテの家とさらにフリードリヒ・フォン・シラー（Friedrich von Schiller）の家を見たと 1910 年 9 月 30 日付の夏目漱石宛の手紙に書いているが、そこでは文豪たちの家が意外に質素なことに驚いている[40)]。②ヒーローに関してはこの他に、1910 年 10 月 18 日付の父寺田利正宛の手紙にゲッティンゲンでオットー・フォン・ビスマルク（Otto von Bismarck）の記念の塔を見たことを書いている[41)]。

次に、③儀礼に関する記述を見る。

1909 年 7 月 18 日付の父寺田利正宛の手紙には、ドイツの日曜日の町の印象が書かれている。

> 今日は日曜にて町は一層淋しく候。日本なれば日曜が一番賑かなわけに候へ共此処では反対に御坐候。第一日曜には市中の店屋は大抵商売を休み店の窓には幕を

38) 『寺田寅彦全集第二十五巻』、95 ページ。
39) 『寺田寅彦全集第二十五巻』、157 ページ。
40) 『寺田寅彦全集第二十五巻』、251 ページ。
41) 『寺田寅彦全集第二十五巻』、259 ページ。

> 下し候故町をあるいてもつまらず、市中の人は大抵近郊の森や湖水へ遊山に出かけ伯林は御留守になり候。［中略］日曜に商買の止るのは馴れぬ日本人には大に不便を感じ候[42)]。

ドイツは現在でも、いくつかの職種を除きキリスト教の安息日である日曜日に仕事をさせることは法律で禁じられている。このように日曜日にほとんどの店が閉まっていることに対して、寅彦は非常に不便を感じていた。

また、1909 年 8 月 2 日付の小宮豊隆宛の手紙には、ドイツ人の女学生の立ち食いについて書いている。

> 大学の廊下や庭や裏のカスタニーンワルドをパンをかじりながらノソリノソリ歩いて見る[ママ]女学生を見ると田舎者には少々恐しくなる[43)]。

寅彦はこのように、女学生の立ち食いに対して違和感を覚えている。当時の日本のマナーでは、考えられないことだったようだ。

寅彦はドイツ滞在中、夏目漱石にしばしば手紙を送っているが、1911 年 1 月 1 日付のゲッティンゲンからの手紙には、ドイツの家庭でのクリスマス（Weihnachten）の様子について書いている。

> 都合で夕食後にバウムに灯をつけました。綺麗でした。室の片側へ机を並べて、皆一同の贈物が陳列してありました。二人の下女もそれぞれ反物を貰って喜んでいました。親子が贈物を取りかわし「ムッター」「ヘレーネ」とお互いに接吻するのはちょっと不思議に思われました。主婦がピアノの前に坐って、皆でワイナハトの歌をうたいました。[中略] 街の家々の窓にもワイナハトバウムの光が映って、ところどころ音楽も聞えて愉快そうに見えました[44)]。

日本では、江戸時代から明治時代初期の 1873 年まで、長い間キリスト教が禁

42) 『寺田寅彦全集第二十五巻』、120 ページ。
43) 『寺田寅彦全集第二十五巻』、133 ページ。
44) 『寺田寅彦全集第四巻』、254 ページ。

じられていた。このようにクリスマスツリーをろうそくなどで飾ったり、クリスマスプレゼントを家族で交換しあったりするドイツ人のクリスマスの過ごし方も、寅彦にとって目新しい印象だったに違いない。

次に、④価値観に関する記述だが、ドイツ人の性格について書かれたものがいくつかある中で、1909 年 7 月 18 日付の父寺田利正宛の手紙には、ドイツ人の綿密さについて書いている。

> 独逸人は兎角綿密家が多くて念に念を押す流儀にて例へば何にでも張り札をして誰れが見てもわかる様に致し置き候。例へば汽車にのりても、此窓をどうしてあけるとか此処を押すとどうなるとか一々張札がしてあり二等客車は此の辺にとまるとか一々掲示がしてあり候[45)]。

このように誰が見ても正しく行えるように、あらゆるものに張り紙を付けることには、ドイツ人の秩序や合理性を重んじる几帳面な性格がうかがえる。

3.2.2.　髙辻亮一のドイツでの異文化体験

次に、保険会社社員の髙辻亮一の日記を見る。

髙辻亮一（1883-1921）は明治生命保険相互会社（現在の明治安田生命保険相互会社）の社員で、1910 年 10 月に保険法を学ぶために会社から派遣されてゲッティンゲンとライプツィヒに留学した。そして 1913 年秋まで約 3 年間ドイツに滞在したが、到着直後の 1911 年 1 月から 4 月まで日記をつけた。彼の死後から約三四半世紀後に、その日記は私家本『獨逸だより月沈原の巻』（1994）・『続獨逸だより莱府の巻』（1995）として上梓された。この日記に記述されている当時のドイツの印象について考察する。

まず、①シンボルに関する記述を見る。

言葉に関しては、1911 年 2 月 7 日付の日記に、下宿先のドイツの家庭で老人が歌うドイツの歌を聞いたときのドイツ語に対する印象の記述がある。

> 歌は多く南ドイツの歌で、丸で外国語のようで、ふつうのドイツ語とは全然ちがう。

45) 『寺田寅彦全集第二十五巻』、121 ページ。

丁度吾々が九州弁や東北弁を解し得ないようなものだ。老人は南ドイツの出だからよく分るが、吾々には北ドイツの詞に直して説明してもらわなければ分らぬ[46)]。

ここでは、ドイツ語の方言の分かりにくさを、九州弁や東北弁に例えている。また、1911 年 3 月 22 日付の日記には、ドイツ人が普段の会話に Gott（神）という言葉を頻繁に使うことについて書いている。

当地の人は神という詞をやたら使う。何か驚いた時、案外の時などには口癖のように Herr Gott（神様よ）と言う。日本語の「あらまあ」「おゝいやだ」「おやおや」などという詞の代りにヘヤ、ゴットの一点張りを用うるからたまらない。一日に廿度や卅度は一人が言うだろう[47)]。

このように日常会話において神様という言葉が頻繁に使われることに驚いている。

服装に関しては、1911 年 3 月 30 日付の日記に、ドイツ人女性の服装に対する印象の記述がある。

出る時に山内がペーター町にホーゼンロックが来たから見て来なさいとのこと。新見と二人で見る。ガラス窓の下に人形に着せてある。[中略] ロックは女の腰から下にさがっている着物を言う。ズボンに似せた女の着物という意味であろう。なるほどズボンを太くして少し風を含ましたようにプーとふくれている。変な物が流行り出したものだ。昔の公卿がはいていたようなものだ[48)]。

ホーゼンロック（Hosenrock）とは今で言うキュロットスカートのことで、ここではそれを公卿の袴のようだと言っているが、このように流行の服装も当時の留学生にとって関心事だったようだ。

次に、②ヒーロ―に関する記述を見る。

46) 『獨逸だより月沈原の巻』、203 ページ。
47) 『続 獨逸だより莱府の巻』、128 ページ。
48) 『続 獨逸だより莱府の巻』、174-176 ページ。

1911 年 3 月 7 日付の日記には、ライプツィヒの公園でオットー・フォン・ビスマルク（Otto von Bismarck）の像を見たときのことについて書いている。

> ビスマルクの像を探す。道の端に立っていた。今から十四年前に建てたもの。愛犬のチーラーという犬を連れて立っている。［中略］下の方から一人の鍛冶屋が両手を広げ、右の手に樫の一枝を持ってビスマルクに献げている。鍛冶屋は即ち人民の一例として示したもので、ビスマルクがドイツ国を築き上げてくれた徳をたたえているのを示したのである。十二、三の男の子が妹二人と犬一匹をこの前に立たせて写真を撮っていた[49]。

このように公園に置かれたビスマルクの像とそれに集う市民たちを見て、ビスマルクがいかにドイツ人に尊敬されている人物であるかを感じただろう。ビスマルクに関しては、1911 年 4 月 6 日付の日記に、今日にも伝わるドイツ料理「ビスマルク風にしんの酢漬け」を食べたことについて書いている[50]。

また、1911 年 3 月 23 日付の日記には、ライプツィヒでゲヴァントハウス管弦楽団の演奏会に行ったときのことについて書いている。

> 指揮者ニキシュ氏は久しくライプチヒに住み、今は世界一、二という評判の天才。冬の廿二回の演奏中の報酬は二万四千マルクであるとのこと。先達てオーストリヤの帝室劇場から高い金で買収に来たのを、ライプチヒ市民が行かれては大変だと大いに反対の運動をしてとめてしまった。三月三十一日迄（十月から）、毎木曜日午後七時に始まり、廿二回の役目がすむと、ニキシュは各国を回って演奏する。外国の人は、ニキシュと言えばライプチヒ、ライプチヒと言えばニキシュを思い出すほど、当地の誇りになっている[51]。

20 世紀初頭の大指揮者アルトゥール・ニキシュ（Arthur Nikisch）は、当時ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団とライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の

49) 『続 獨逸だより莱府の巻』、40 ページ。
50) 『続 獨逸だより莱府の巻』、194 ページ。
51) 『続 獨逸だより莱府の巻』、135-136 ページ。

常任指揮者を務めていた。この記述からは、ニキシュがライプツィヒの市民からいかに尊敬されていたかということと、音楽が市民にとっていかに大切なものであったかということがうかがえる。

次に、③儀礼に関する記述を見る。

1911 年 1 月 28 日付の日記には、下宿先のドイツ人の家族から、誕生日を祝われたことについて書いている。

> 食事中子供が一つずつ植木鉢を持って入って来た。お誕生日でお目出度うございますと言う。［中略］不意を打たれて一寸まごついたが、厚く礼を言って受け取り、窓のふちにのせておく。一つは名を知らぬ白い花で、一つは紫色のすみれ。きつく匂っている。食事がすんだ頃、又子供が大きな丸い菓子を持って来た。見ると老人と夫人の名刺があって、Herzlichen Glückwunsch!（満心の祝意を表す）と書いてある。大きな皿の上にきれいな真白のナプキンをひいてその上にのせてある。礼を言って机に向かって開き封の絵はがきを見ていると、老人が入って来て祝意を述べ、序でに「Im bunten Rock」（縞の着物で）という小説を貸してくれた[52)]。

ドイツ人は、今日でも誕生日を重要視する[53)]。日本では一般に、子供の頃は誕生日を派手に祝われることも多いが、大人になるとあまりない。このとき 28 歳になった亮一は、このように家族から多くのプレゼントやメッセージでもって祝われて驚いている。

また、1911 年 2 月 4 日付の日記には、前述の寅彦と同様ドイツ人の道路での立ち食いについて書いている。

> 往来では大人も子供も度々物を食べながら（りんご、パンなど）歩いているのを見る。一体こういうことはやかましくない[54)]。

52) 『獨逸だより月沈原の巻』、145-146 ページ。
53) 麦倉（2004）、219-220 ページを参照。
54) 『獨逸だより月沈原の巻』、186 ページ。

現在は日本でも立ち食いをする人をたびたび見かけるが、当時の日本ではマナーに反する行為だったようだ。

また、1911 年 2 月 20 日付の日記には、人前でキスする行為について、下宿先のドイツ人の女主人との会話が書かれている。

> 日本ではキッスをしないかと夫人が問うたから、人の前でそんなことをすると大いに侮辱になる、礼儀処ではなく、大した譴責を食う、一度ハイカラな女学生と男学生がステーションでキッスをして巡査に叱られたと言ったら大いに笑っていた[55]。

寺田寅彦は、クリスマスの際にドイツ人の母娘が互いに接吻するのを不思議に思ったと手紙に書いていたが、ここではドイツ人の夫人が、日本の駅において学生のカップルがキスしたことに対し警察官が注意したことに驚いている。このように愛情表現のマナーについて、当時の日本とドイツの違いがうかがえる。

また、1911 年 3 月 23 日付の日記には、ライプツィヒで前述のゲヴァントハウス管弦楽団の演奏を聴いているときの観客の態度について書いている。

> 音楽中は、二千五百の詰め切った客一同は、恍惚として酔ってしまってささやき一つするものは居ない。[中略] 曲中は皆静かに酔って聞いている。曲が終ると拍手鳴りもやまず、指揮者が客の方を向いてお辞儀をする、又拍手する、又お辞儀する、又拍手する[56]。

大勢の観客がこのように演奏中にささやきもせず静かに聴くという態度は、現在の日本のクラシック音楽の演奏会では当然のマナーとされているが、当時の日本人には印象深く映ったようだ。

また、1911 年 4 月 12 日付の日記には、復活祭（Ostern）について書いている。

> 復活祭は Ostern（ヲスターン）と言う。別に贈物のやりとりはせぬとのこと。こ

55) 『獨逸だより月沈原の巻』、268-269 ページ。
56) 『続 獨逸だより莱府の巻』、136-137 ページ。

> の日の印は、玉子、兎、雛などで表わす。絵はがきを見ると、何れもこれを画いて「復活祭おめでとう」などと印刷してある。兎は達者にまめに走るから、まめなようにという意味。玉子と雛とはどうも分らない[57]。

復活祭では、雛が卵から孵ることをキリストの復活と結びつけ、多産なウサギを生命力の象徴としている。彼は初めてドイツの復活祭に接し、復活祭とウサギ・卵・雛との関係がよく分からなかったようだが、宗教行事であることは認識している。

次に、④価値観に関する記述だが、ドイツ人の性格について書かれたものがいくつかある中で、1911 年 3 月 5 日付の日記には、ドイツ人の張り紙の習慣について書いている。

> ドイツ人は何でもやたらにべたべた書きつける癖がある。汽車の便所に入っても、分り切っているのに、ここに水、ここに手拭、このねじを右に回せ、使用済の上は水を流せ、などとどこ迄も書きつける。町の名でも角々や急所々々によく分るように緑色（るり色）の金に白い字で書いてある。広場の如きも、ここは何という広場と必ず書いてある。建物の如きも、裁判所とか、大学とか、尽く書いてある。勝手の分らぬ者にもすぐ分るように、まごつかんでよい。きちょうめんな国民である。あまりきちょうめんで、実に神経質だと思うことがある[58]。

寺田寅彦の 1909 年 7 月 18 日付の手紙の記述と同様、ここにもドイツ人が社会の秩序を重んじていることと、几帳面な性格がうかがえる。

4. 第一次世界大戦以前の異文化体験の日独比較

以上、第一次世界大戦以前の日独間の異文化体験について、ホフステードの文化の表出のレベルの順に日本人とドイツ人の記録を見てきた。

本稿で取り扱った記録を見る限り、やはり最も観察されやすい①シンボル（言葉・しぐさ・服装・髪型など）に関する記述が他のレベルに比べて多く、日本人

57) 『続 獨逸だより莱府の巻』、215 ページ。
58) 『続 獨逸だより莱府の巻』、27 ページ。

の記録（寺田寅彦・髙辻亮一）では、特に言葉（ドイツ語）に関する記述が頻繁に見られた。

①シンボルの次に観察されやすい②ヒーロー（その文化において非常に高く評価される人物）に関しては、本稿で取り扱った記録にはあまり見られず、むしろ③儀礼（社会的儀礼・宗教的儀礼・挨拶の仕方・尊敬の表し方など）に関する記述の方が多く、中でも宗教行事に関する記述（クリスマス・復活祭・祇園祭・正月等）が多く見られた。寅彦と亮一は、ドイツの宗教行事を通じて、「ドイツの文化とキリスト教とは不離一体の関係にある[59)]」ことを感じただろう。一方、シュリーマンは日本人の生活に宗教心があまり浸透していないと書いている。

④価値観（ある状態の方が他の状態よりも好ましいと思う傾向）に関しては、日本人とドイツ人の性格について書かれた記述がいくつか見られた。ドイツ人の日本人の性格に対する印象については、「日本人の清潔さ」に感心する記述がシュリーマンの記録に見られ、また「日本人の礼儀正しさ・自制心」に感心する記述がベルツの記録に見られた。現代においても、外国人から見て、日本人が清潔好きで礼儀正しいというイメージがあることはよく言われる。

ただし、シュリーマンの「日本人の清潔さ」に関する記述は、少し誇張されたような印象も受ける。クラウディア・デランク（Claudia Delank）は、19 世紀までのドイツにおける日本像について、次のように述べている。

> […] ドイツにおける日本像は、19 世紀まで少数のステレオタイプに限定された。つまり、女性の繊細さ・侍の大胆不敵なこと・日本の刑罰制度の残酷さ・村や町の清潔さである[60)]。

17 世紀末に来日した博物学者のエンゲルベルト・ケンペル（Engelbert Kämpfer）の著書 „Geschichte und Beschreibung von Japan“（『日本史および日本誌』）や 19 世紀前半に来日した医師のフィリップ・フランツ・フォン・ズィーボルト（Philipp Franz von Siebolt）の著書 „Nippon. Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern“（『ニッポン、日本とその隣国および保護国の記録』）は、

59) 麦倉（2004）、192 ページ。
60) Delank (1996), S. 29.

当時のドイツ人への日本に関する情報提供に貢献したと言われる[61]。したがって、ドイツ人の記録を読む際は、このような先入観も考慮するべきであろう。

一方、日本人のドイツ人の性格に対する印象については、「ドイツ人の綿密さ・几帳面さ」に感心する記述が寺田寅彦と髙辻亮一の記録に見られた。寅彦と亮一のこれらの記述は、現代においてもドイツ人が秩序を重んじる国民というイメージがあることを連想させる。

いずれにせよ、このように性格に関する記述には、価値観は変化しにくいというホフステードの説[62]を裏付けるものがいくつか見られた。

また、日本人の記録とドイツ人の記録を比較したときに、①シンボルの中で言葉についての記述が日本人の側に多く見られるのは、当時の日独関係が影響していると思われる。明治時代の日独関係の特徴について、田嶋信雄は次のように述べている。

> 日独関係の主要な舞台は、もちろん国家的要請の枠内ではあったが、法学や医学や軍事学といった文化的・学術的な領域に集中する傾向にあり、しかもその関係は、しばしば「教師と生徒の関係」が比喩として用いられるように、ドイツから日本への単方向的な文化移転として発現していたのであった[63]。

当時の日本人留学生たちは、ドイツから学ぶためにドイツ語を一生懸命学んだ。

寅彦と亮一の記録にドイツ語に対する印象の記述が多く見られるのは、そのこととももちろん関係しているだろう。逆にベルツの記録には、日本語の印象よりも日本人がどのくらい西洋語が話せるかという記述がいくつか見られた。これは彼がお雇い外国人という立場で日本に来たことと関係しているだろう。一方、旅行者として日本に来たシュリーマンの記録には、日本語そのものについて観察している記述も見られた。しかし、語学に非常に関心のあったシュリーマンにしては、日本語に関する記述はあまり見られなかった。

また、②ヒーローに関する記述は、ドイツ人の記録よりも日本人の記録の方に

61) Vgl. Delank (1996), S. 29.
62) ホフステード（2013）、16 ページを参照。
63) 工藤章/田嶋信雄（2008）、4 ページ。

多く見られた。日本人の方が相手国（ドイツ）の重要人物をより強く意識していたことも原因と考えられるが、これもやはり「ドイツから日本への単方向的な文化移転」という当時の日独関係の特徴を反映していると思われる。

さらに、③儀礼の中の宗教行事に関する記述では、ドイツ人の記録において日本人の宗教心に批判的な記述（シュリーマン）や日本の宗教行事を自国の宗教行事にたとえる記述（ベルツ）が見られたが、日本人のドイツの宗教行事に関する記録には、このような記述（批判や自国との比較）は見られなかった。この点もまた、当時の日独の単方向的な関係の特徴を反映していると思われる。

5.　まとめ

本稿で取り扱った記録の筆者たちの異文化を記述する視点は、ホフステードの文化の表出のレベルに大体沿っているように見える。また、文化の中の観察可能な慣行に関する要素、特にファッション、行儀（たとえば道路上のマナー）などは時代とともに変化するが、直接観察できない価値観は変化しにくいというホフステードの説を裏付ける記述もいくつか見られた。

ただし、個々の記録を詳しく見ていくと、ホフステードの文化モデルに合致しない部分（たとえばドイツ人の記録に②ヒーローに関する記述が少ないことなど）も見られ、そこから当時の日独関係やそれぞれの立場・目的が彼らの視点に影響することがうかがえた。

第一次世界大戦以前の日独間の異文化体験の記述の特徴について、さらに他の同時代人の記録を分析して考察を深めるとともに、第一次世界大戦以降の日独関係の変化によって、相互の異文化を記述する視点がどのように変化したかを追うことも今後の課題としたい。

参考文献

＜一次文献＞

Bälz, Erwin: Das Leben eines deutschen Arztes im erwachenden Japan: Tagebücher, Briefe, Berichte. Stuttgart（J. Engelhorns Nachf.）1931.

Schliemann, Heinrich: Reise durch China und Japan im Jahre 1865; aus dem Französischen von Franz Georg Burstgi. Konstanz（Rosgarten）1984.

シュリーマン、ハインリッヒ『シュリーマン旅行記清国・日本』石井和子訳、講談社学術文庫、1998 年。

髙辻亮一『獨逸だより 月沈原の巻』錦美堂整版 KK、1994 年。

髙辻亮一『続 獨逸だより 莱府の巻』錦美堂整版 KK、1995 年。

寺田寅彦『寺田寅彦全集 第一巻』岩波書店、1996 年。

寺田寅彦『寺田寅彦全集 第二巻』岩波書店、1997 年。

寺田寅彦『寺田寅彦全集 第三巻』岩波書店、1997 年。

寺田寅彦『寺田寅彦全集 第四巻』岩波書店、1997 年。

寺田寅彦『寺田寅彦全集 第二十五巻』岩波書店、1999 年。

ベルツ、トク編『ベルツの日記（上）』菅沼竜太郎訳、岩波文庫、1979 年。

ベルツ、トク編『ベルツの日記（下）』菅沼竜太郎訳、岩波文庫、1979 年。

＜二次文献＞

Delank, Claudia: Das imaginäre Japan in der Kunst. München（iudicium）1996.

岡部朗一「文化とコミュニケーション」古田暁監修/石井敏/岡部朗一/久米昭元『異文化コミュニケーション』有斐閣選書、1996 年。

小塩節『ドイツのことばと文化事典』講談社学術文庫、1997 年。

河原俊昭「歴史に探る異文化理解の深層」淺間正通編『異文化理解の座標軸』日本図書センター、2000 年。

工藤章/田嶋信雄編『日独関係史 1890‐1945』東京大学出版会、2008 年。

島谷謙『日本を愛したドイツ人　ケンペルからタウトへ』広島大学出版会、2012 年。

デランク、クラウディア『ドイツにおける＜日本＝像＞』水藤龍彦/池田祐子訳、思文閣、2004 年。

ホフステード・G 他『多文化世界』岩井紀子・岩井八郎訳、有斐閣、2013 年。
麦倉達生『異文化理解へのアプローチ』大学教育出版、2004 年。
和田博文他『言語都市国家・ベルリン 1861 - 1945』藤原書店、2006 年。

（たかつじ・まさひさ　学習院大学科目等履修生）

Interkulturelle Beziehungen zwischen Japan und Deutschland vor dem Ersten Weltkrieg

MASAHISA TAKATSUJI

Vor dem Ersten Weltkrieg studierten im Zuge der Modernisierung Japans viele Japaner in Deutschland. Während ihres Aufenthaltes in Deutschland schrieben sie Tagebücher und Briefe. Umgekehrt reisten Deutsche in der Zeit vor dem Ersten Weltkrieg nach Japan, und auch sie schrieben in Japan Tagebücher und Briefe. In meinem Aufsatz betrachte ich, auf der Grundlage dieser Dokumente die interkulturellen Beziehungen zwischen Japan und Deutschland vor dem Ersten Weltkrieg, zu deren Analyse ich das Modell der Kultur von Hofstede heranziehe.

Der niederländische Sozialpsychologe Geert Hofstede, unterscheidet vier Schichten der Kultur: Symbole, Helden, Rituale und Werte. Zu den Symbolen zählen Worte und Gesten der Menschen, aber auch ihre Kleidung und Frisur. Diese Symbole bilden die Oberfläche der Kultur und die für uns sichtbarsten Dinge. Helden sind Personen, die in dem jeweiligen Kulturkreis ein allgemeines Ansehen genießen. Zu den Ritualen wiederum gehören soziale und religiöse Zeremonien, Begrüßungsformen sowie Darstellungen von Ehrerbietungen. Die Werte sind Ideen, die von den Menschen für gut gehalten werden. Diese Werte bilden als für uns unsichtbare Dinge den Kern der Kultur.

Vor dem Hintergrund dieses Kulturmodells werden Dokumente von Heinrich Schliemann, Erwin Bälz, Torahiko Terada und Ryoichi Takatsuji untersucht. Der deutsche Archäologe Heinrich Schliemann kam auf seiner Weltreise im Jahre 1865 nach Japan und hielt sich für einen Monat hier auf. Nach diesem Aufenthalt verfasste er eine Reisebeschreibung. Erwin Bälz war ein deutscher Arzt, der 1876 Japan besuchte, um Medizin zu lehren. Er hielt sich bis 1905 in Japan auf und führte ein Tagebuch während dieser Zeit. Torahiko Terada war ein japanischer Physiker, der im Jahre 1909 nach Deutschland fuhr, um dort zu studieren. Während seines Aufenthalts in Deutschland, der bis 1911 andauerte, schrieb er viele Briefe und nach seiner Rückkehr verarbeitete er in seinen Essays die

Eindrücke von Deutschland. Ryoichi Takatsuji war ein Versicherungsangestellter, der 1910 nach Deutschland reiste, um ebenfalls dort zu studieren, und der während seines Aufenthalts bis 1913 regelmäßig Tagebuch führte.

In den behandelten Dokumenten sind eine Vielzahl von Symbolbeschreibungen zu finden, und bei den japanischen Verfassern lassen sich viele Hinweise auf „Helden“ wie Johann Wolfgang von Goethe, Otto von Bismarck, Arthur Nikisch beobachten. Im Hinblick auf die Rituale waren besonders häufig Beschreibungen über religiöse Zeremonien zu finden, und was die Charaktereigenschaften betrifft, so wurde vor allem die Höflichkeit der Japaner und die Genauigkeit der Deutschen erwähnt.

Ein Vergleich zwischen den japanischen und deutschen Verfassern zeigt, dass Japaner mehr als die Deutschen über Sprache und Helden schrieben, was darauf zurückzuführen ist, dass zu dieser Zeit viele Japaner im Zuge der Modernisierung in Deutschland studierten und die deutsche Sprache lernten. Im Gegensatz dazu schrieb Bälz, der als Lehrer nach Japan kam, in seinem Tagebuch wenig über die japanische Sprache. Meine These ist, dass die damaligen Beziehungen zwischen beiden Ländern stark durch die Modernisierungsbestrebungen Japans und die Weltmachtpolitik Deutschlands geprägt worden sind.